大阪樟蔭女子大学論集第39号（二〇〇二）

山路の露注釈（十）

西木忠一
池田良子

凡例

一、本稿は『続群書類従』巻第五百十（物語十）『山路の露』を注釈したものである。

一、『続群書類従』本は全編区切らず書き続けてあるが、内容上から適宜段に分け、各段ごとに見出しを付した。

一、本注釈は、本文・通釈・語釈・補記の四項より成る。

一、本文は読解の便宜を考え、適宜次のような工夫を加えた。

(1) 仮名づかいは歴史的仮名づかいに統一した。

(2) 時には仮名書きの語を漢字に、漢字書きを仮名に改めた。

かほる→薫　せうと→兄人

猶→なほ　其比→そのころ

(3) 句読点を付し、送り仮名を補った。

(4) 反復記号はもとの文字にもどした。

中々→なかなか

(5) 会話や消息の部分は「　」で示した。

一、甚しい本文異同のある場合は補記の項で触れた。なお、その項における「第一類本」（主として「刊本系」）「第二類本」（主として「写本系」）の呼称は、本位田重美氏（『源氏物語外篇　山路の露第一類本第二類本』）の呼称を踏襲したものである。

一、語釈・補記の項で明示した諸作品の本文は、『新潮日本古典集成』によった。ただし、上記以外の場合はその都度出典を明記した。

二十八　五重

右近はこの隙に近くさし寄りつつ、「さてもいかなりしことにか」などきこゆれば、「われながらうつつともおぼえず、いみじく憂かりけり」とて、たえずうち泣き給へるけしき、いとあはれなり。さだ過ぎたるみにくき人だに、かかるさまになりぬれば、こよなく若やぐものなめるを、ましてただ幼き児の心地して、あえかに心苦しきかたさへそひて、さば

かりこちたかりし御髪の短くそがれたれば、五重もすぎていくらともなく重なりたるほど、裾のそぎめのなかなかいとめでたきにも、またかくらし、「さはなどかくはなり給ひにけむ。見たてまつりし世に、かばかりさまざまうとましき御心づかひおぼしかけんとは、夢にだに思ひきこえやはせし。さもあさましく、しのびすぐさせ給ひし御心かな。右近も幼くより、またなく頼みきこえさせて、いかなるみちにもおくれたてまつらじと思ひ給へし甲斐なく、けしきだにかすめきこえさせ給はざりしつらさ」などきこえて、つきせず泣きゐたり。

〔通釈〕

右近はこのすきに（浮舟に）近く寄って行き、「それにしても（これは）どういうことなのですか」などと申し上げると、（浮舟は）「自分ながら（これが）現実のこととも思えず、ひどく辛いことです」といって、堪えられず泣きなさる、（その）様子はひどく胸にしみ入るものである。年を増したみにくい人でさえ、こうした（尼姿に）なってしまうと、却ってこの上もなく若やぐものらしいのに、（浮舟は）それ以上にただもう幼い子を見る感じがして、弱々しく心苦しさまでも加わってしまって、あれほどかさ高だった髪が（今はすっかり）短くそがれたので、五重の扇以上に数えきれないほどに重なっているあたり、裾の方のそぎめが却って結構であるのも、（それを見る右近は）また胸が一杯になって、（右近は）「とはいえ、どうしてこのようにおなりなさったのでしょうか。お世話申し上げていたあの頃にいろいろといやなご計画を立てておいでとは（私は）夢にも存じませんでした。それにしても、がっかりするほどに、こっそりと心のうちをお隠しなさったことですね。わたくし右近も幼い頃から、（姫君を）この上なくお頼り申し上げて、どんな折にも（姫君に）遅れ申すまいと存じておりました甲斐もなく、つゆほどもそんな素振りをお見せなさらなかった辛さは」などと申し上げて、つきることなく泣いていた。

〔語釈〕

○かかるさま――浮舟の出家姿（尼姿）をいう。

○あえかに心苦しきかた――「あえかなり」は、もし触れればすぐこぼれ落ちそうなさまで、いかにもなよなよとしている様子をいい、たおやかだ・危なっかしいの意。

○五重――五重扇（いつへのあふぎ）の略。補記②の項参照

○見たてまつりし世――（私が）お仕え申していたあの頃。

〔補記〕

①本段には次の箇所に本文異同が見える。

(1)「あえかに心苦しきかたさへそひて」の傍線箇所、第二類本は「いとゝそひ奉りて」とする。

(2)「御髪の短くそがれたれば、五重もすぎていくらともなく重なりたるほど」の傍線箇所、第二類本は次のごとくである。

a＝そかれたるも

b＝こちたくて

c＝いくゑ

(3)「裾のそぎめのなかなかいとめでたきにも」の傍線箇所、第二類本

には見当たらない。

(4)「さはなどかくは」の箇所、第二類本は「はかなくてさはなとて」とする。

(5)「かばかり」の箇所、第二類本は、「かはりて」とする。

(6)「夢にだに思ひきこえやはせし」の箇所、第二類本には、「夢にも思ひやはきこえさせし」と見える。

(7)「さもあさましく、しのびすぐさせ給ひし御心かな」の傍線箇所、第二類本は次のごとくである。

a＝さも心うくあさましく

b＝忍ひかくさせ給

(8)「かすめきこえさせ給はざりしつらさ」の箇所、第二類本は「かすめ聞えさせたまはぬ有しつらさ」とし、『日本古典全書』七「古本山路の露」（池田亀鑑校註）は「かすめ聞えさせ給はぬめりしつれなさ」とする。

(9)「つきせず泣きゐたり」の箇所、第二類本は「つきせす泣めり」とする。

②「五重もすぎて、いくらとも……」について。

枕草子に「三重がさねの扇。五重はあまり厚くなりて、もとなど憎げなり」と見える。

新潮日本古典集成『枕草子　上』（初版本）頭注一〇（二〇三頁）

『河海抄』巻四に、「桜の三重がさね（中略）檜扇の両方の上三枚づつを薄様にて裏みて、色々の糸にて綴ぢて、末をあはび結びに結びて垂れたる也。五重扇同風情也」とあり、……を、中村清兄氏の『日本の扇』（河原書店・昭和十七年）、『扇と扇絵』（河原書店・昭和四十四年）によって、

檜扇の製作には薄板八枚を一単位として数える。三重とは薄板二十四枚、五重とは四十枚の物を指す。ただし四の凶数を避けて、それ以下の奇数のものが多い。したがって五重の扇は三重よりも華美ではあるが、要が分厚くなりすぎる。従来、『紫明抄』『河海抄』『貞文雑記』等の所説に従って、両端の薄板三枚とか五枚とかを薄様の紙で包んだものと考えていたことは改める。と改変されている。

因に中村清兄氏の「扇史大概」（『日本の文様　扇』光琳社・昭和五十四年）から抜粋しておくことにする。

約三〇糎程の長さ、約三糎ほどの幅の、主として桧の薄板を下端近くに小孔を穿って結束し、上端近くを編綴して出来上るものが桧扇であるが、この発生の時期は九世紀又はそれ以前にある事は確実である。（中略）木簡製作の過程では、杉或いは桧の角片を割裁するのであるが、そこに必然的に同一の木片から作られた薄片数片が一束の木簡束とせられた。これを一組として桧扇が発生する。従って桧扇の枚数はこの一組を単位として増減する事によってなされた。これが即ち三重とか五重とかの名称の起原である。三重がさねの桧扇とか五重がさねの桧扇とかの名称は藤原盛時にすでに定着していたのである。源氏物語や枕草紙などに散見する

事によって知られるが、これらのかさね桧扇の実体は桧扇の薄板の数による事であって、実際には一重は八枚、三重は二十三枚又は二十五枚、五重は三十八枚又は三十九枚の桧扇である（四頁）。なお、新潮日本古典集成の頭注改変に関しては、『枕草子解環　二』萩谷朴（同朋舎出版・三三二頁〜三三四頁）に詳細に述べられている。

浮舟の髪について手習の巻に、

(1)……髪は長くつやつやとして、大きなる木の根のいと荒々しきに……
――宇治院での発見時

(2)……尼君はよろこびて、せめて起こしすゑつつ、御髪手づからけづりたまふ。さばかりあさましく、ひき結ひてうちやりたりつれど、いたくも乱れず、解き果てたれば、つやつやとけうらなり。――五戒を受けた時

(3)例の方におはして、髪は尼君のみけづりたまふを、異人に手触れさせむもうたておぼゆるに、手づからはた、えせぬことなれば、ただすこし解き下して、親に今一度かうながらのさまを見えずなりなむこそ、人やりならずいと悲しけれ、いたくわづらひしけにや、髪もすこし落ち細りたるここちすれど、何ばかりもおとろへず、いと多くて、六尺ばかりなる末などぞ、うつくしかりける。筋なども、いとこまやかにうつくしげなり。――出家決意の時

(4)……髪のすその、にはかにおぼとれたるやうに、しどけなくさへそがれたるを、むつかしきことども言はで、つくろはむ人もがなと、何ごとにつけてもつつましくて、……――出家を果たした翌朝

(5)……髪は五重の扇を広げたるやうに、こちたき末なり。――浮舟の出家姿を、中納言垣間見

と語られていて、その年齢ではない浮舟の出家に関して、語り手も十分心して語り続けてきた。いま『山路の露』の「五重もすぎて、いくらとも……」は、手習の巻(5)の出家姿を受けて語られている。

なお、『山路の露』においては、

(1)髪などさかりにうつくしかりしも、そぎやつしつらんさまよなど……
（三　黒髪）

(2)……御髪などのありしにもあらぬを見るに……（九　御髪）

(3)……額髪のゆらゆらとそぎかけられたる、……（十五　額髪）

と語られていたことを確認しておく。

③「右近も幼くより……」について。

浮舟の失踪翌朝のこと。乳母たちは「さては身を投げたのでは」と思いついた。そこへ浮舟の母から再度の文が届く。「今宵は夢にだにうちとけても見えず、ものにおそはれつつ、ここちも例ならず……」（蜻蛉）と語られていた。右近は昨夜浮舟がしたためた母への文を開けて見る。すると、そこには入水覚悟のことが記されていた。

「さればよ、心細きことは聞こえたまひけり、われに、などかいささかのたまふことのなかりけむ、幼かりしほどより、つゆ心おかれたてまつることなく、塵ばかり隔てなくてならひたるに、今は限りの道

にしも、われをおくらかし、けしきをだに見せたまはざりけるが、つらきこと」（同）と、あまりの悲しさに足摺りして泣いたのである。

④右近が浮舟に語りはじめた。出家した姫君を前にして、右近はどうしても納得できない。そんな右近を見る浮舟も泣くのみである。右近は「五重もすぎて、いくらともなく重なりたる」髪を見ると胸にせまり、彼女は涙のうちに語る。

「私は姫君がこんな姿におなりなさろうとは夢にも思わなかったのです。なぜ、私には素振りにも見せず内密に出家されたのですか」と悲痛な思いを話す。

前段は浮舟の母と妹尼との対話の場面であった。妹尼は母親的立場にあって、あたかもその場は母親と同世代の立場であった。対して本段は、浮舟の乳母子右近と浮舟という、次世代ともいうべき対話の場面である。

二十九　人　目

かの宮の御ことも語り出でて、「いみじう人目見苦しきまで、おぼしなげくめりしに、ほど経ればれいの御すきごとどもきこえ給ふさへこそあはれに侍れ。かの殿のたとしへなくのどかに、ぬるきやうに見え給ひしかども、忘るる世なくあはれにおぼし入りつつ、右近などまでたづねかずまへ給ふも、その御ゆかりとおぼしためるにこそ、かたじけなく見奉り侍れ。のどやかなる折など、近く召し寄せて、つきせぬ御ことのみのたまひ出でつつ、『おはせし世には、おぼつかなかるものにこそおぼしけめども、人はかく心ながくやはある。いつとても心のいろは同じことなれど、おほかたたゆまじき身のくせは、こよなく浅きかたにのみなん人目には見えける。今はいと甲斐なしや。たれかこと問はん。伝へきこゆるまぼろしもあらば、さりともあはれとはおぼしなんかし』など、語らはせ給ふをりをり侍るにも、げにこそあはれに見奉り侍りぬれ」など語りきこゆれば、あはれにもはづかしうも、さまざまかきみだり思ひ続け、うつし心の色こさはさこそと聞き給ふに、なほあやしや、目の前のあはれにならされ奉りて、少しもなびきけん心がろさのみぞ、いはんかたなく憂かりける、よしや、そもこの世ひとつの報いならじ、人をばなにか憂しと思ひきこえん、身のあはあはしくさすらふべき契りにてこそ、さる乱れもありけめと思ふには、ただのがれがたき身の憂さぞ、世世の報いも口惜しく思ひ知られ給ひける。さても、ひたすら世に亡きものと思ひはてけん故郷（ふるさと）の人にあひむかひて、またたちかへりその世のありさま聞きぬるは、夢語りなどの心地して、めづらかにもあはれにもいかがおぼえざらん。ながらふる限りは、さすがかくたれにもやうやうあひ見るを、今はとなりし夕べまで、心苦しう思ひおきし乳母（めのと）も、思ひにたへずなくなりけん命のほど、あはれに悲しくぞおぼしける。

〔通釈〕

（右近は）あの宮（匂宮）のことも語り出して、（右近）「ひどく人目も身苦しいまでにお思い嘆きなさるようでしたが、時が経てばいつもの

ごとく好色めいたことまでお話しになりましたのはおいたわしゅうございます。あの殿（薫君）がたとえようもなくのんびりと、愛情も薄いようにお見えになりましたが、お忘れなさる時なく、情愛深くお思い込みになり、この私右近までも人数（ひとかず）に入れてお尋ねなさいますのは、姫君のご縁続きとお思いくださる故と、ありがたく見申し上げております。人の少ないのんびりとした折などには、（私を）そば近くお召し寄せになり、尽きることのない胸のうちばかり申し出されまして、（薫）『姫君がおいでになった時には、（私を）どうも気がかりな者だとお思いであったらしいが、他の人はこの（私の）ように気ながに愛情を持ち続けるであろうか（きっとそうではあるまい）。何時でも（私の）心の内は同じことであるけれども、おおよそ堪えがたい我が身の癖は、人目にはこの上なく情愛薄く見えたことであろう。今はもう（何といってみても）甲斐のないことだ。誰にことの次第を尋ねようか。（私の気持を）お伝え申し上げる幻術師がいたならば、やはり（私を）気の毒だとお思いなさるに違いない』などと、お話しなさる折がしばしばありますにつけても、本当にしみじみと（薫君の胸のうちが）感じられたことでした」などと申し上げると、（浮舟は）しみじみとも、また体裁悪くも、いろいろと心乱れて思い続け、（薫の）情愛の深さはそれほどであったとお聞きなさると、やはり不思議なことだ。（匂宮の）目の前の情愛にすっかり慣らされ申し上げてしまい、少しでも心をなびかせてしまった私の心軽さは、いいようもなく情ないことである。ままよ、そんなこともこの世ひとつの報いでもあるまい、薫君をどうして情ないと思い申し上げようか、わが身が軽々しくあちこちにゆれ動くべき契りであってこそ、しかるべき心の乱れもあったことであろうと思うにつけ、これはただのがれがたいわが身の不運であることだ（などと）、前世からの報いも口惜しく思い知られなさった。それにしても、一途にこの世に亡きものと思い果てたらしい故郷の人（右近）に対面して、またふり返ってそのころの様子を聞いたのは、あたかも夢語りなどのような心地がして、どうして珍しくもあわれにも思わないであろう。この世に生きている限りは、さすがにこのように誰にでもだんだんと会うことになるのを、いよいよこの世も終わりと思ったあの夕べまで、心苦しう思っていた乳母も、（辛い）思いに堪えずに亡くなってしまったらしい命のほどを、（浮舟は）胸にしみて悲しくお思いなさるのであった。

〔語釈〕

○ぬるきやうに――それほど情愛が深くないように。

○のどやかなる折――その場の雰囲気がおだやかな時。ここでは人の少ない時をいう。

○おはせし世――浮舟がこの世においでなさった頃。

○まぼろし――幻術者。補記⑤の項参照

○うつし心――現実の心。確かな心。正気。「……憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづね参るべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、……」（紫式部日記）

○なほあやしや――どう考えてみても、やはり不思議なことであるよ。

○目の前のあはれ――自分の目前に見せられた情愛で、ここでは匂宮

が浮舟に見せた情愛をいう。

○身のあはあはしく――「あはあはし」は「いかにも表面的で根が定らず、危なっかしくて信用できないさま」(『角川古語大辞典』)。

○世世の報い――前世からの因果応報の結果。

○今はとなりし夕べ――もうこれまでと、死を覚悟した夕方。補記⑥の項参照。

〔補記〕

①本段には次の箇所に本文異同が見える。

(1)「れいの御すきごとどもきこえ給ふさへこそあはれに侍れ」の箇所、第二類本は「礼の御すきことども聞えさせ給、うへこそあはれに侍」とする。

(2)「おほかたたゆまじき身のくせは」の箇所、第二類本は「おおかたたひ〳〵しき身のくせ」とし、『日本古典全集』七「古本山路の露」(池田亀鑑校註)は「おほかたたいだいしき身の癖」とする。

(3)「たれかこと問はん」の箇所、第二類本は「誰かことはらむ」とする。

(4)「うつし心の色こさはさこそと聞き給ふに」の箇所、第二類本は「こゝろの色のとけ初きこへたまふにこそ」とする。

(5)「目の前のあはれにならされ奉りて」の箇所、第二類本は「めのまへの哀にはかされ奉りて」とし「古本山路の露」は「目の前のあはれにはかられたてまつりて」とする。

(6)「身のあはあはしくさすらふべき契りにてこそ」の傍線箇所、第二類本にはなく、「身のあはあはしき契にてこそ」としている。

(7)「めづらかにもあはれにもいかがおぼえざらん」の傍線箇所、第二類本は次のごとくである。

a＝ナシ

b＝おほささらん

(8)「思ひにたへずなくなりけん命のほど」の箇所、第二類本は「たへずなりけむ命のほと」とする。

②「いみじう人目見苦しきまで」について。

浮舟入水を知った時、匂宮は「二三日はものもおぼえたまはず、うつし心もなきさまにて、いかなる御もののけならむ、など騒ぐに、やうやう涙尽くしたまひて、おぼししづまるにしもぞ、ありしさまは恋しくいみじく思ひ出でられたま」うのであった。その時、「いかなることにかくおぼしまどひ、御命もあやふきまでしづみたまふらむ」とまで言う人がいたほどである。浮舟入水は匂宮にこれほどまでの打撃を与えたのであった。その頃の匂宮のことをここで語っているのである。

③「ほど経れば……」について。

蜻蛉の巻には浮舟入水をめぐって薫と匂宮の悲しみを語っている。宇治に訪れた薫は、右近から浮舟入水のことを聞き、自分がなさねばならぬことを知るのであった。まず、彼は浮舟四十九日の法要を営んだ。一方の匂宮について物語は「あやにくなりし御思ひの盛りにかき絶えては、いといみじけれど、あだなる御心は、なぐさむや、などこころみたまふこともやうやうありけり」と語る。「残りの人をはぐくませ

たまひても、なほいふかひなきことを、忘れがたく思ほす」薫に対して、他の女に言い寄ってみることもだんだんとなさると語る匂宮は、本来「あだなる御心」の持ち主であったので、至極当然の結果であるといえよう。

④「右近などまで尋ねかずまへ給ふも……」について。

薫は「人しげからぬほど」に右近を「いまぞ召し寄せて、まほならねどのたまひ出でたる」のであった。浮舟を小野に訪ねたことを右近に語ったのである。右近は「思ひあきれたるさま」であったと『山路の露』（本注釈（七）二十一「御文」）にて語っていた。

⑤「まぼろしもあらば……」について。

「野分だちて、にはかに膚寒き夕暮のほど」に「靫負の命婦」は大納言邸に桐壷帝の命を受けて赴いた。彼女は更衣のかたみとして、「かかる用もやと残したまへりける御装束一領、御髪上の調度めく物」を宮廷に持ち帰った。待っていた帝は「尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」と詠じたのであった。帝が「幻もがな」と詠じているのは「幻術師がほしい」とのことで、『長恨歌』によるものである。

それは、

臨邛方士鴻都客　能以精誠致魂魄
為感君王展転思　遂教方士殷勤覓
排室馭気奔如電　昇天入地求之遍
上窮碧落下黄泉
臨邛の方士鴻都の客
能く精誠を以って魂魄を致す
君主の展転の思ひに感ずるがために
遂に方士をして殷勤に覓めしむ
室を排き気に馭って奔ること電の如し
天に昇り地に入りて求むること遍し
上は碧落を窮め下は黄泉までにす

（『新潮日本古典集成　源氏物語一』による）

⑥「今はとなりし夕べ」について。

その夜、乳母は「あやしく心ばしりのするかな。（母君からの文にも）夢もさわがし、とのたまはせたりつ。宿直人、よくさぶらへ」と（女房に）言わせているのを、浮舟は困ったことだと聞いていたのである。邸を抜け出そうとする浮舟には宿直人の十分なる夜警は、この際は望ましくないのであった。浮舟巻末に語られたところである。乳母はその時、浮舟に「ものきこしめさぬ、いとあやし。御湯漬」とすすめていた。

⑦匂宮に比べ、いかに「かの殿（薫）」が情愛深かったかを、右近が語りはじめた。薫が自分は「こよなく浅きかたにのみなん人目には見えける。今はいと甲斐なしや」と嘆きのうちに語ったことを、浮舟に告げる右近は、「あはれに見奉り侍りぬれ」と結んだ。匂宮の情熱に心をなびかせてしまったのだと、悔いを抱く浮舟は、のがれがたきわが身の不運を思うとともに、前世からの報いの口惜しさもしみじみと感

じたことであった。

右近から薫の言葉を聞くにつけ、ひとまわり大きくなった浮舟が感じられよう。それは「乳母」の死を思うところにも、ひとしお感じられる。こうして浮舟は一段の成長のあとを見せている。

三十　客　人

客人（まらうど）も今宵はとまりぬれば、尼君のかたよりゆゑある桧破籠（ひわりご）やうのもの、都には目なれぬくだものなど、をかしきさまにとりなして、こなたにたてまつり給へり。うちもまどろまず、つきせぬものがたりに長き夜もなにならず明けぬれば、帰りなんとかたみにあかず思ひ給ふ。「道のほどのはるけさも、おなじ世に侍らば、おぼつかなからぬところへいかで渡し侍らん。昔かの時時かくろへ給へりしあやしの宿はおぼえ給ふや。ところはいと広く侍れば、さりぬべきさまにつくろはせなして、渡しきこえんと思ひ侍るを、大将殿のいみじう忍ぶべくのたまへば、それもいかがとはばかられ侍るも、などか人の知るべき。忍びてこそはと思ひ給ふる」など泣く泣くきこゆ。あるまじきことやとは聞き給ひながら、ただうち泣き給て「いぶせきはげになかなかなるべけれども、かかるさまし たる人は、わざとだにたづぬべき山の奥をわけ出でて、人目しげきすまひはうたてあらん」といひまぎらはして、うちそむき給へるかたはら目、いひ知らずをかしげなるを、いとどしく悲しと思へり。

〔通釈〕

客人（達）も今夜は（ここ「小野」で）泊まったので、尼君の方からいわれのある桧破籠（ひわりご）らしきものや、都では見慣れないくだものなどを、（それぞれに）見ばえのするように整えて、こちら（客人方）に奉りなさった。いささかもまどろむことなく、尽きることなく（あれこれ）話し合っているうちに長い夜もなんということもなく明けてしまったので、（都へ）帰ろうとしてお互いにあきることなく（別れを惜しみ）なさる（のであった）。（浮舟の母）「（京への）道の遠さも、同じこの世に生きていたならば、（これほど）気にならぬ所へなんとしてでもお渡し申そう。昔、あの時どき身をかくされたあやしげな邸はご記憶なされておいでですか、場所は大層広うございますので、しかるべきようにつくろわせなどして、お渡し申し上げようと存じておりますが、大将殿（薫）がひどく（人目を）はばかるようにおっしゃるので、（京の）広い邸に移るのもいかがなものかと気がひけますものの、どうして世間の人が知ることができましょう。こっそり人目を忍んでこそ（お移しを）と存じております」などと、泣く泣く申し上げる。（浮舟は）そんなことはあるまいと聞きながら、ただわれ知らず泣いてしまい、（浮舟）「うっとうしいのは本当にまだ落ち着かないようですが、このような（尼）姿をした者は、わざわざ尋ねねばならないような山の奥から抜け出で、人目の多いすまい（に移るの）はよろしくないことでしょう」と、あれこれ言いまぎらわして横を向いてしまわれた（その）目つきは、いいようもなくきれいであるのを、（浮舟の母は）ひどく悲しいことだと思ったことで

ある。

〔語釈〕

○桧破籠（ひわりご）――桧の薄板を曲げて作った破子（わりご）。「破子」は食物などを入れる木製で蓋つき客器をいう。なお、破子の中でもとりわけ上等のもので、形は現在のへぎの折り詰め弁当箱によく似ている。

○道のほどのはるけさ――帰っていく道の遠さ。

○あやしの宿――三条のかくれがをいう。補記②の項参照

○かかるさましたる人――このような出家姿になった人。

○かたはら目――横顔。

〔補記〕

①本段には次の箇所に本文異同が見える。

(1)「客人も今宵はとまりぬれば」の箇所、第二類本は「誠や、今宵はあかすおほえて立とまりぬれは」とする。

(2)「いぶせきは」の箇所、第二類本は「いふせさ也」とし、『日本古典全書』七「古本山路の露」（池田亀鑑校註）は「いふせさは」とする。

(3)「たづぬべき山の奥を」の箇所、各本に異同が見られる。

・たづぬる山のおくを（第二類本）

・たづぬるが、山の奥を（古本山路の露）

・たへぬべき山のおくを（鎌倉時代物語集成）

・堪へぬ山の奥を（完本源氏物語新解・金子元臣著）

(4)「いひ知らずをかしげなるを」の箇所、第二類本は「あひ行つきいひ知らずをかしげなるを」とする。

②「あやしの宿」について。

東屋の巻の「方違（かたたが）へ所（どころ）と思ひて、小さき家まうけたりけり。三条わたりに、さればみたるが、まだ造りさしたる所なれば、はかばかしきしつらひもせでなむありける」と見えた家のことで、乳母の話から、浮舟の身を案じた母君が用意したものであった。その時、母君は浮舟に「ここは、まだかくあばれて、あやふげなる所なめり。さる心したまへ。曹司（ざうし）曹司（ざうし）にある物ども、召し出でて使ひたまへ。宿直人（とのゐびと）のことなど言ひおきてはべるも、いとうしろめたけれど、かしこに腹立ち恨みらるるが、いと苦しければ」と、涙のうちに語っていた。

③翌日、別れに臨んで浮舟の母は娘に、こっそり都へ移そうと思っていると語る。しかし、娘浮舟は「人目しげきすまひはうたてあらん」と言いまぎらわしてしまう。浮舟は尼姿ゆえに山奥から抜け出すのは望ましくないというのであった。いろ〳〵とまぎらわしながら語る浮舟。その時、顔をそむけてしまった彼女の美しさ。それを母はたとえようもなく悲しく見ている。この美しさを捨てて尼姿になった娘を、母の目はひたすら惜しみつつ見ているのであった。